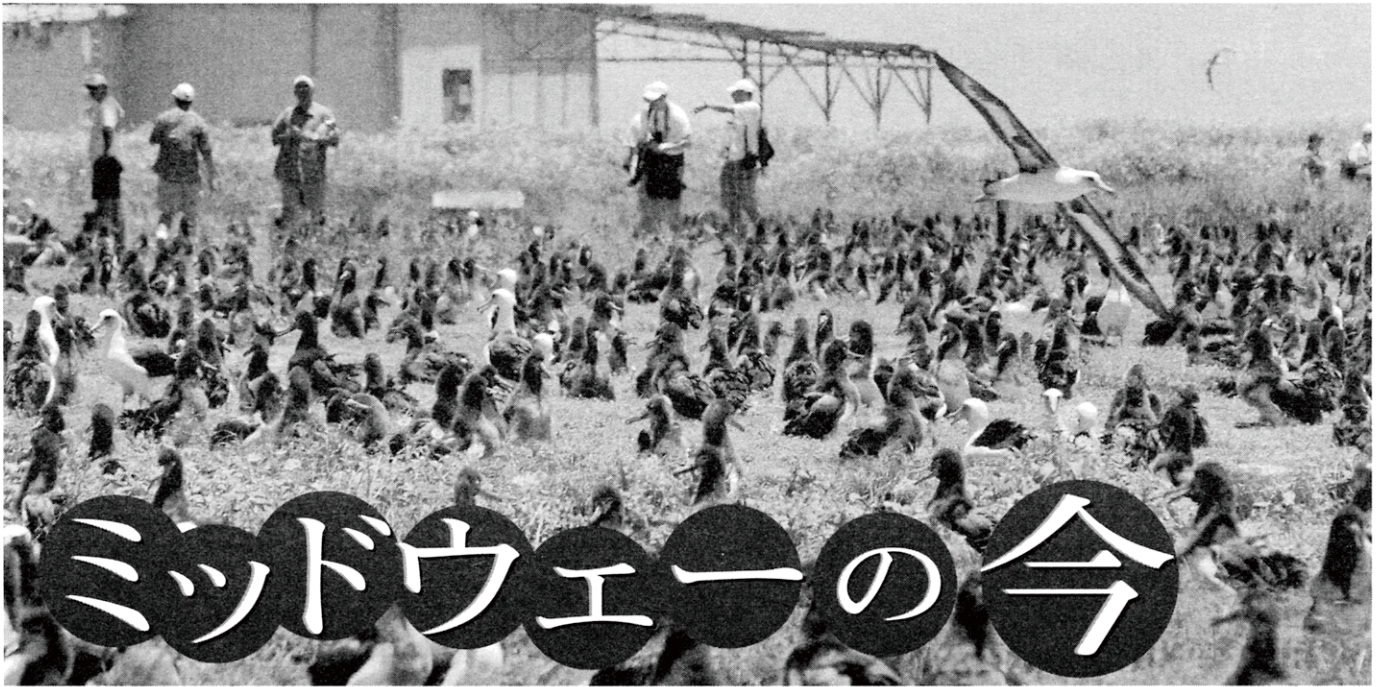
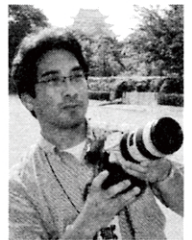




北西ハワイ諸島のミッドウェー環礁は、OWSの創立と大きなかわりを持ってきた。軍事基地としての役割を終え、環境教育とエコツアーの拠点として、また、希少動物の保護研究の拠点として生まれ変わろうとしていたミッドウェーは、創立間もないOWSにとって格好の舞台であった。残念なことに、島の施設運営を受託していた米国法人の突然の撤退により、OWSのミッドウェープロジェクトも終了を余儀なくされた。あれから5年を経た今年6月、ミッドウェー海戦の65周年記念式典がミッドウェーで開催されることとなった。これまでミッドウェーの取材を行ってきた読売新聞社の加藤学氏が、その機に現地を訪れることとなり、急遽ミッドウェーの現状をレポートしていただくこととなった。



テキスト：加藤 学
(読売新聞・写真部)

機内からのミッドウェー環礁は、昔と変わらず青く輝いていた。

ミッドウェー海戦から65年にあたる先月4日、同環礁のサンド島で米国退役軍人らが参加する65周年記念式典が開催され、久しぶりにたくさんの観光客が訪れた。

北西ハワイ諸島のミッドウェー環礁は日本から東へ約3500キロ、太平洋

の中間地点である。そのため洋上の要所として米軍の基地となった。第2次世界大戦では日米合わせて3300人もが戦死したミッドウェー海戦の戦場の一つとなった歴史がある。

1996年、基地の役目を終えると自然を体感しながら環境を学習する場として、米国内務省に移管され国立公園となった。FWS(米国魚類野生生物局)が駐在し管理、研究をしている。

1日あたりの利用者が100人を超えないという条件のもとで、観光客を受け入れていたが、2002年3月、同環礁で宿泊施設などを管理運営していた会社が撤退。同環礁へ定期的に運

行していた空路もなくなり、事実上の閉鎖になった。

今回の式典は、閉鎖後初となる観光客受け入れだが、日帰りのツアーで滞在が6時間ほどだった。

ホノルルを離陸し2時間半が過ぎたころ、ミッドウェー環礁が見えてきた。

周囲30キロの大きな環礁にサンド島、スピット島、イースタン島が次々に眼下に広がる。イースタン島は防風林がなくなりさっぱりしていた。

イースタン島は戦時中の空港島だった。ミッドウェーが開放されていた時、週に数日イースタン島に上陸できるツアーがあった。



サンド島全景



大きな樹木の伐採が終わり見晴らしがよかったイースタン島

スタッフによる島の説明やゲンカンチョウ、カツオドリ、アジサシが飛び交っている様子が思い浮かぶ。その滑走路は今も残り上空からはっきり見える。

以前は、周辺に人が植えた防風林があり、それが鳥たちの生態系を崩していた。元の状態に戻す取り組みが行われていたが、その作業は見事に終わっていた。

見晴らしの良くなったイースタン島を通り過ぎサンド島に着陸。飛行機のタラップにでると、青空を飛び回るアジサシや優雅に旋回するコアホウドリが出迎えてくれているようだった。

式典は駐機場の前にある建物の反対側にある広場で厳粛に開催された。

式典の参加者は約1600人。空路以外にも近海を航海している大型客船の乗客も参加。「こんなにたくさんのひとがミッドウェーにいるなんて、初めて見た」とFWSの職員も目を丸くするほどたくさんの人が訪れていた。

日本からは、OWSのミッドウェーフィールドオフィスマネージャーだった田畑政己さんら5人が参加。田畑さん自身も閉鎖後初で5年ぶりの来島だった。

島のあちらこちらに巣立ちが近いコアホウドリたちが草原に腰掛けたようにたたずんでいた。

まだ黒い毛が頭を覆っているが下半身は親と同じ。時折吹く風に、毛がなびき気持ちよさそうに目を閉じていた。

成鳥たちは日射を避けるため木陰でかたまっている。時折求愛のダンスをしては観光客の目をひいていた。

また、海岸周辺の林にはアカオネットイチョウが飛び交い、木の枝にはセグロアジサシが休憩している。昼間めっ

たに姿を見ることができないアナドリも顔出していた。

栈橋近くのきれいな砂浜にはハワイアンモンクシールが昼寝をし、アオウミガメが甲羅干しをするため上陸していた。

身近に動物たちがいる。ミッドウェー環礁は貴重な自然そのままの姿を見ることが出来る学習の場であることに変わりなかった。

しかし、ミッドウェーを取り巻く漂流ゴミの問題は変わっていない。

栈橋近くの広場には回収された漂流ゴミが山積みになっていた。

大きなものは、ちぎれた漁網やブイ、小さなものは100円ライター、ペットボトルのキャップ、歯ブラシが無数に回収されている。

このゴミが今もミッドウェーに生息する動物たちを苦しめている。

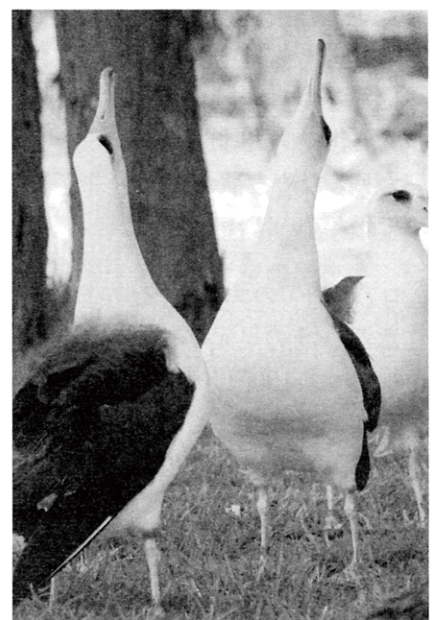
ちぎれて海中をさまよう網はハワイアンモンクシールにからみつки、ビニー



ミッドウェー65周年記念式典に参加した退役軍人ら



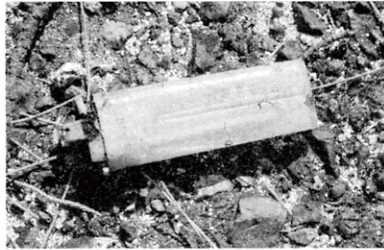
昼寝をするハワイアンモンクシール



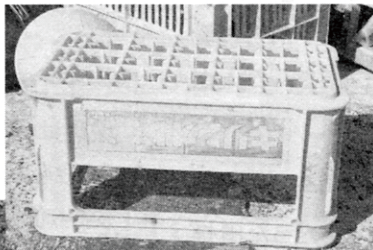
求愛のダンスを練習するコアホウドリの成鳥



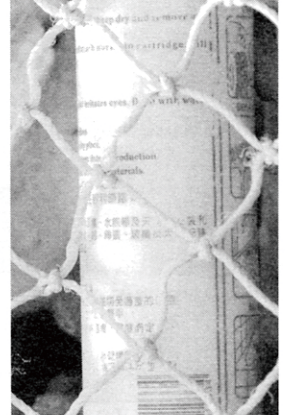
回収された日本製のシャンプー容器



コロニーに落ちていた100円ライター。ヒナが吐いた物と思われる



ゴミ回収場に散乱する小さなプラスチック製品



回収された中国語が記された容器



コアホウドリのヒナが吐いた跡。その多くはプラスチックの破片ばかり

回収された日本メーカーのビールケース



親を待つコアホウドリのヒナ。その周辺にはプラスチックの破片が散乱していた



清掃したばかりの海岸に打ちあがる漂流ゴミ



漂流ゴミの集積場にあるさびた韓国製のパソコンの一部



山のように積まれた魚網などの漂流ゴミ

ルの袋はウミガメがエサと間違え食べている。

また、洋上に浮かぶ小さなゴミはエサを探す親鳥たちにエサと勘違いさせ、ヒナに与えている。

漂流ゴミは口移しに与えられ胃の中で消化できずに貯まっていく。満腹感が残るため食欲がなくなり栄養失調で死んでいくヒナも少なくない。

コアホウドリのコロニーを歩きながら注意深くヒナの足元をみるとペットボトルのキャップ、100円ライターやプラスチック製のゴミが転がっている。それらは雛に与えるエサとして、親が運んできたものなのだ。

前回訪れた、99年には回収された

漁網やブイがまるで水揚げが終わった漁港のように整然と港に置かれていて圧巻だったが、式典に参加する船が往来するためそこには何もなかった。

大型客船から来島する人たちが上陸するため、人目に付かないところに移動したようだ。

日本近海で捨てられたゴミは海流に乗って3500キロ離れたミッドウェー近海に集まってくる。

相変わらずその多くは中国、韓国、日本製だ。ペットボトルにプラスチックケース。シャンプーの容器、パソコンの一部が積まれていた。

式典が開催されるため数日前に海

岸の清掃が行われたが、早くも漂流ゴミはたどり着いていた。

「中国、韓国、日本からのものばかり、それぞれの国からボランティアでゴミ拾いに来て欲しいよ」FWS職員の言葉が胸に刺さる。

太平洋をさまようゴミの多さを改めて知り、依然解決できない問題であると感じた。

世界最大、90万羽以上のコアホウドリが生息する、ミッドウェー環礁は近年もう一つ深刻な問題が発生している。

島を散策するとコアホウドリたちの



バーバシーナに道路まで追いやられたコアホウドリのコロニー



バーバシーナに囲まれたコアホウドリ

繁殖地に黄色い花「バーバシーナ」が生い茂っているところが目立った。

外来の植物「バーバシーナ」はキク科で米国中南部が原産、1950年代に荷物に紛れ、90年代に繁殖を始めたと言われている。

2mほどに成長するため、地べたに産卵するアホウドリやアジサシなどの鳥にとっては迷惑な植物で、歩行と離陸が苦手なコアホウドリには壁になっている。

ミッドウェー環礁が公開されていたころ、FWSやOWSのスタッフが外来種の伐採を観光客に呼びかけ駆除をしていた。根が頑丈で結構な重労働だった。しかし、事実上の閉鎖となった今、人手がなくなり、駆除がままならなくなったため繁殖していた。

FWSの資料によると、1991年にサンド島で生息するバーバシーナの面積は18.2haだったが2004年調査では60ha。東京ドームのグランド約32個分が増加したことになる。

「コアホウドリたちが居場所を追いやられたため原っぱから道路に出てきていますよ」と5年間ミッドウェーでコ

アホウドリたちを見てきた田畑さんは心配する。しかし、一気に伐採することができる道具や人はここにはない。何もできない。

「現在、島には研究者と空港維持要員合わせて40人しかなく、マンパワーが不足している。元の状態に戻すには5年にかかる。今のところバーバシーナによる鳥たちの減少はないが」とFWS北西ハワイ諸島野生保護計画のジェリー・レイネック次官は現状を語る。

太平洋の貴重な生態系が残るミッドウェー環礁。米国政府も国家遺産として保護していくことを宣言している。が、40人ほどのスタッフが維持できるほど、環境が復元されていない。

漂流ゴミの問題は、ミッドウェーだけでなく、海流沿いにある、はるかかなたの国々の協力なくして解決できない。

外来植物は伐採しても地中に埋没した種まで取りのぞかねばならない。時間と労力が求められている。

まず、維持できる環境の復元が優先だ。それには定期的にボランティアツアーなどを開催することが必要と感じた。

滞在時間が限られ、クロアシアホウドリやアホウドリのコロニーまでたどり着けなく悔いが残る。

一日も早く、ミッドウェーへの空路が再開され、外来種駆除や海岸の漂流ゴミ削減を訴える活動ができる日が来るのを願う。



ゴミ集積場の近くで子育てをするコアホウドリ